

しばた・けいこ 1962年愛媛県生まれ。広島大学文学部考古学専攻卒業。財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター嘱託員。現在、道後公園内の湯築城資料館に勤務。研究テーマは、遺跡から出土する土器・陶磁器を素材にした、中世伊予の地域史。



資料館内の素焼きの皿の展示



草花の文様の
ある皿

花の絵が描かれた皿

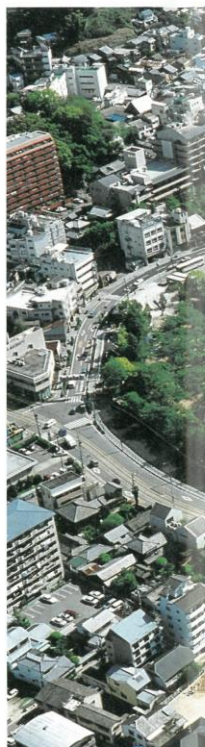
最も多いのは素焼きの皿です。当時の身分の高い武士は、普段の食事では中国陶磁器などを使っていますが、お客様を迎える際の儀式や宴会では、これを使うという決まり事があったと言われています。一度使われたものは捨てましたから、「土器溜り」と呼ばれる土器捨て場がたくさんみつかります。安価なお皿でも、たくさん使えばお金がかかります。当時の庶民からみれば考えられない贅沢と言えるでしょう。

しかし、これらの皿を生産して城に供給していたのは、土器作りの工人たち、つまり庶民でした。素焼きの皿をよく観察すると、作り方や、土の質や色にいろいろ違ったものがあることに気がきます。それは、一箇所までとめて生産したのではなく、小さな生産地が城の周辺（この場合は松山平野内くらい）にたくさんあったことを示しています。なかには花の絵が描かれた特注品と思われるものもあって、作り手側の工夫と、それを求めた武士たちの風雅な心すら感じ取ることができます。

城での生活とそれを支えた多くの人たち。シンプルな皿が両者の息吹を伝えています。

先人の文化遺産

考古学探訪



湯築城跡（道後公園）の全景。〈柳エヒメフォトサービス提供〉武家屋敷などが復元され、資料館が併設されています。

戦国考古学への招待(上)

柴田 圭子

時代時代を生きていた人々の日々の生活の積み重ねが、遺跡となって私たちに多くのことを語ってくれます。戦国時代であっても、それに変わりはありません。戦国時代の印象と言うと、織田信長や武田信玄、羽柴秀吉などの名だたる武将が活躍し、武士たちが血で血を洗う合戦を繰り広げていたイメージが強いのではないのでしょうか。今回お話しする「湯築城跡」は、その頃の遺跡です。

伊予国守護河野氏の居城であった湯築城跡（国指定史跡）は、戦に備えた城の構えである二重に巡らされた水堀や土塁が往時のままだに残り、まさに戦国時代のタイム・カプセルのような遺跡です。ではそこから出土するものも、いかにもといった武器などが多いかという決断はそうではありません。素焼きの皿や、外国から輸入された陶磁器、備前焼の大きな甕や播磨など、この城の住人たちが、日常使用していた道具類が出土します。